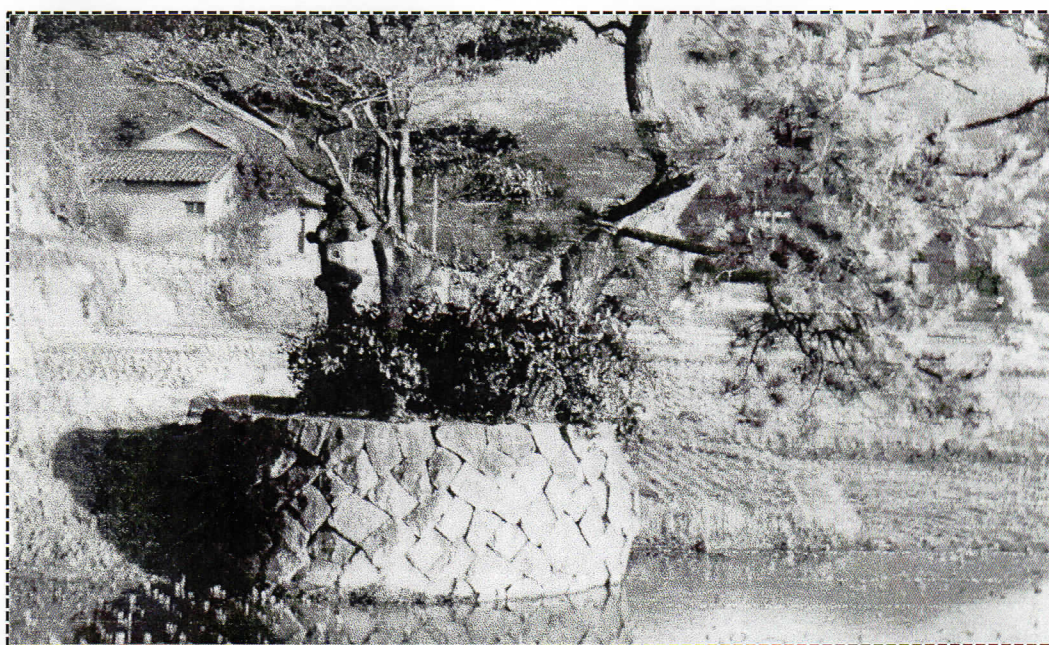


嘉久志ふる里探訪



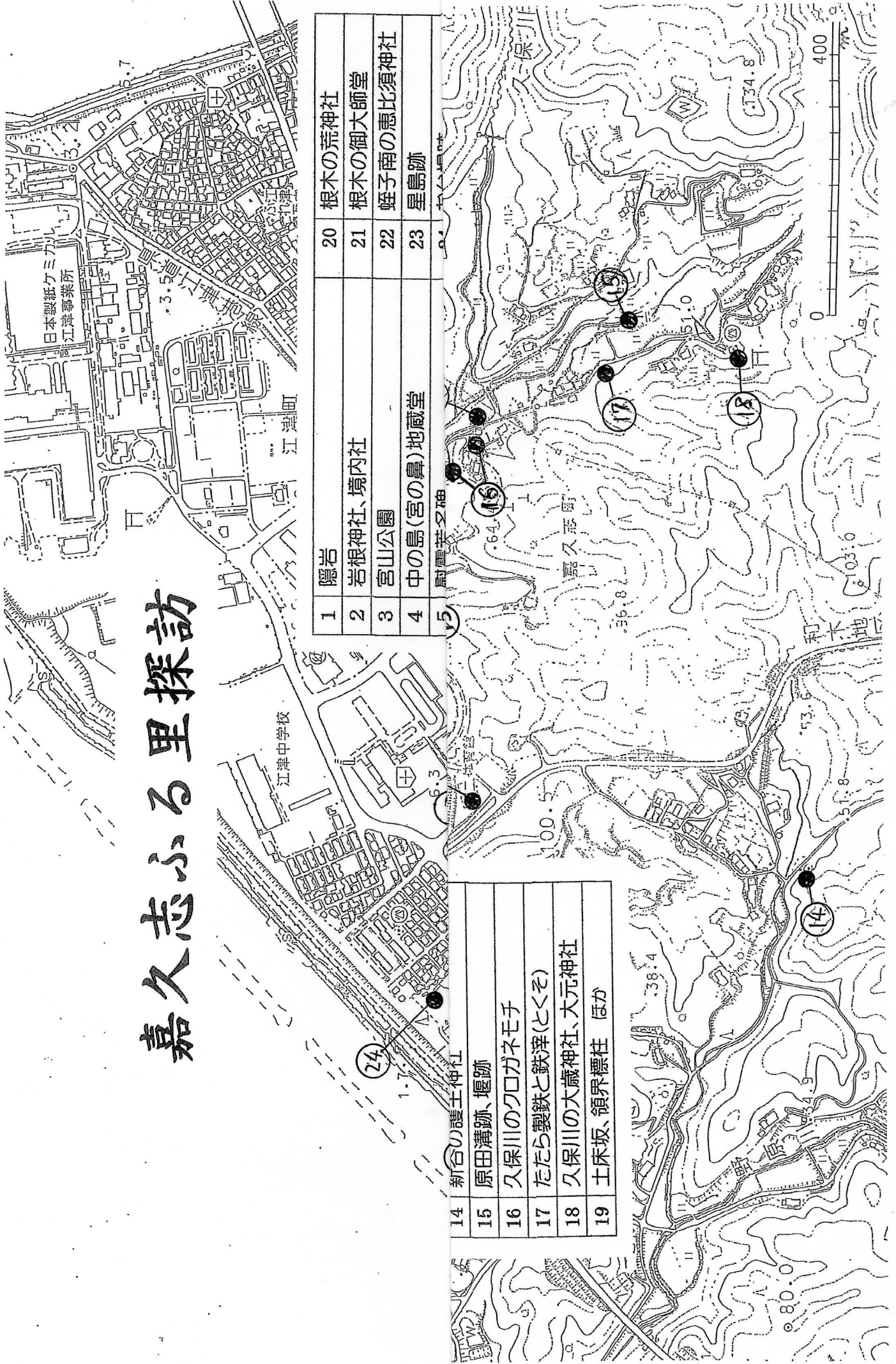
「かくれ岩」

(昭和 28 年頃)

嘉久志まちづくり推進協議会

郷土学習会

嘉久志ふる里探訪



1	隠岩	20	根木の荒神社
2	岩根神社、境内社	21	根木の御大師堂
3	宮山公園	22	蛭子南の恵比須神社
4	中の島(宮の鼻)地藏堂	23	星島跡

14	新台の護土神社
15	原田溝跡、堰跡
16	久保川のクロガネモ子
17	たたら製鉄と鉄滓(とくそ)
18	久保川の大歳神社、大元神社
19	土床坂、領界標柱 ほか

24

15

17

19

18

14

400

日本製紙ケミカル
江津専業所

江津中学校

和木地区

嘉久志町

100.5

38.4

4.9

51.0

80.0

103.0

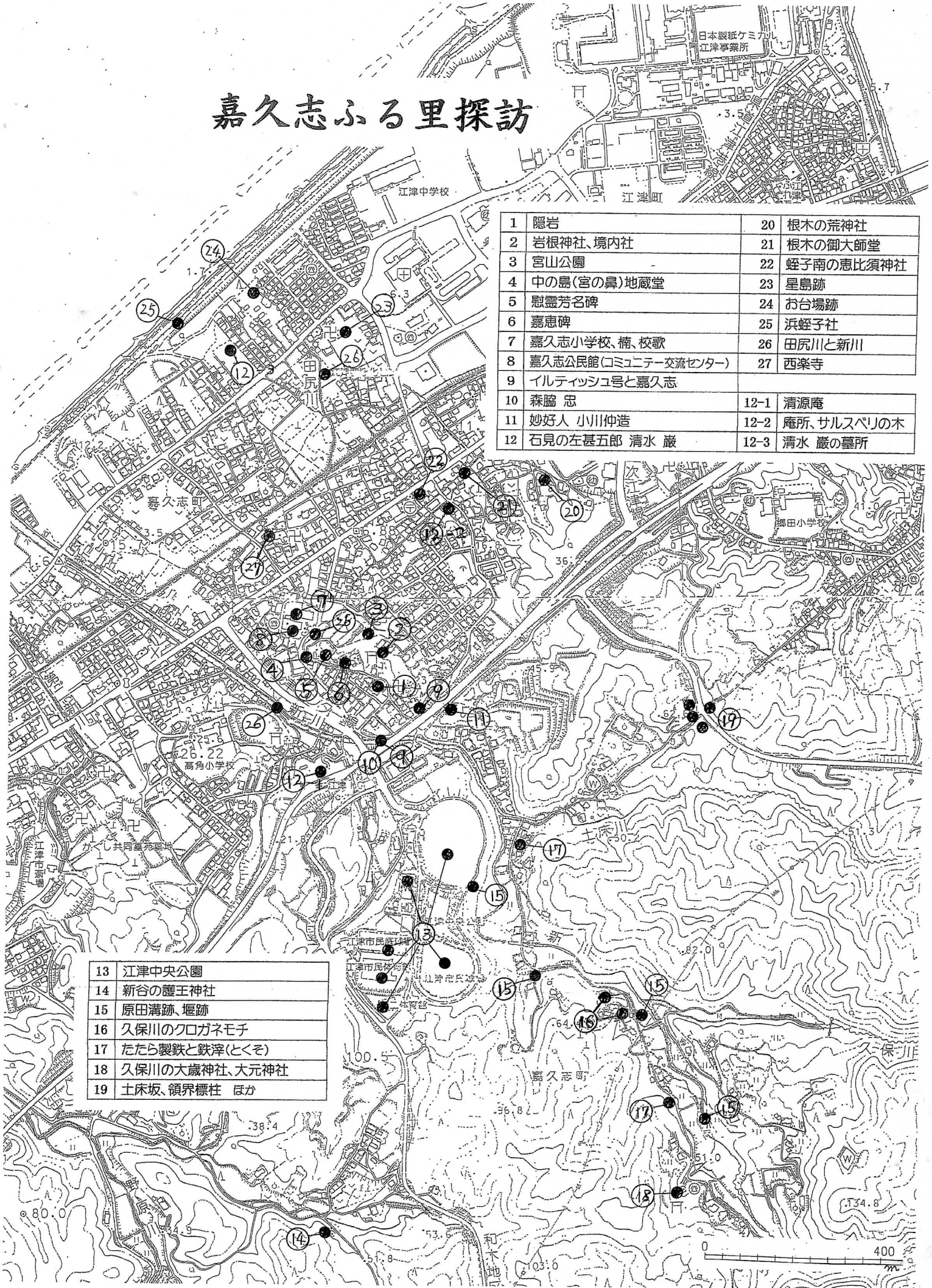
134.8

64.1

36.8

400

嘉久志ふる里探訪



1	隠岩	20	根木の荒神社
2	岩根神社、境内社	21	根木の御大師堂
3	宮山公園	22	蛭子南の恵比須神社
4	中の島(宮の鼻)地蔵堂	23	星島跡
5	慰霊芳名碑	24	お台場跡
6	嘉恵碑	25	浜蛭子社
7	嘉久志小学校、楠、校歌	26	田尻川と新川
8	嘉久志公民館(コミュニティー交流センター)	27	西楽寺
9	イルティッシュ号と嘉久志		
10	森脇 忠	12-1	清源庵
11	妙好人 小川仲造	12-2	庵所、サルスベリの木
12	石見の左甚五郎 清水 巖	12-3	清水 巖の墓所

13	江津中央公園
14	新谷の護王神社
15	原田清跡、堰跡
16	久保川のクロガネモチ
17	たたら製鉄と鉄滓(とくそ)
18	久保川の大歳神社、大元神社
19	土床坂、領界標柱 ほか

① 隠岩

古名に「隠石」という地名の記録があり、以下のような‘神話’が残っている。

十羅刹女(じゅうらさつめ)の森(現岩根神社)の前に鳥居があり、それより30~40mほど南へ行った所に縦5尺横4尺ほどの岩がある。その岩に出雲へ帰ろうとしていた田心比売(たごりひめ)は、腰をかけて休んでいた。そこへ、波志(波子)から養い老夫婦たちが連れ戻そうと追って来た。田心比売は、この岩に隠れて追っ手から逃れた。そこからこの岩を「隠石(岩)」というようになった。

「かくし」の地名は、この神話「隠石(岩)」からきているといわれる。聖武天皇神亀5(728)年に、この地を「隠石」から「かくし」に改めたという記録があり、その岩は今も大切に保存管理されている。

なお、追っ手から逃れた田心比売は出雲に帰り、十羅刹という賊を倒して父須佐能男命に許され、後に「十羅刹女」の御神号をもって祀られた。そして、ゆかりの地「隠石」すなわち『かくし(嘉久志)』にも十羅刹神社(現岩根神社)が建立された。



注連縄がはってある「隠岩」

田心比売 (たごりひめ)

須佐能男命の姫であるが、気性が激しかったので‘はこ舟(丸木舟)’で海へ流された。波志(波子)に流れ着いたとき老夫婦に救われ、その養女として大事に育てられた。後に、古さと出雲の混乱を知り、居てもたってもいられなくなって抜け出し帰郷した。その途中のことが「隠岩」神話として伝えられている。

入口にある「案内板」

かくれ岩の伝説

神代の昔、「波子の浦」に見目美わしき六・七歳の童女、「ハコフネ」に乗って漂着した。

近くに住む老夫婦、子供のないま、いたく喜んでこの童女を慈しみ育て、いたどころ、この娘十二・三歳のある夜、「出雲の国」に異変あるを知って直ちに帰国せんとし思い立ち老夫婦に、まこと吾が名は「胸鉏姫」とて出雲の国の神の子直ちに帰国して難を鎮めるべしと、止める老夫婦をふり切つて出雲の国へ向う途中この地の椎の木の下、大岩の陰に身をかくし、追跡の目を逃れ後大功を立てしと言ふ。老夫婦、「浅利の浦」まで送り力つきて亡くなったと言ふ。

以来この岩を「かくれ岩」又は「かくれ岩大明神」と稱え、この地の人から崇められ今日に及ぶ嘉久志の地名はこれより生じたと古老達は伝う。

胸鉏姫命は波子早脚神社に祀られ給う。

撰者 岩根神社宮司 二宮 義久

② 岩根神社・境内社

創建ははっきりしない。祭神は、神話「隠岩ゆかりの‘田心比売=十羅刹女’とされている。古くは「十羅刹社」、「十羅刹神社」として信仰されてきた（①「隠岩」参照）。御神像の裏面に、応永7（1401）年と書かれていることから、社殿は少なくとも今より600年以上前にあったと考えられる。

また、神社の沿革等には、嘉永21（1644）年に出雲国日御碕神社より御分霊勧請され、また、神仏判然令を受けて明治6（1869）年に社名を「岩根神社」と改めたこと等が記されている。以後、嘉久志村の“村社”（氏神）として信仰されてきている。

町村合併（昭和15年）に先立ち、他の村の神社に劣らないような社殿にしたいという村民の強い願いと奉仕により、現在のような社殿等が昭和11年に完成した。

一方、本社殿の左奥には、境内社として王子神社、皇子神社、護王神社、金毘羅神社、稻荷神社が移され祀られている。

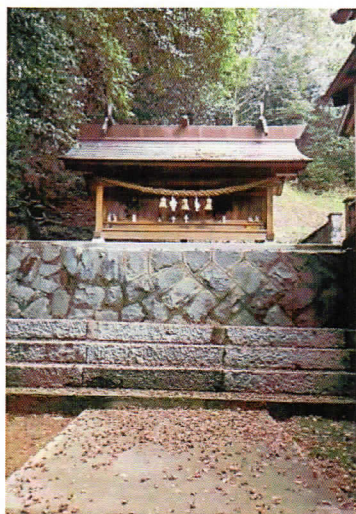
また、境内から宮山公園への小路の右斜面には、「神木之跡」の碑があり、神木であった松の切り株も残っている。この松は、高さ約30m、周囲が約6mあって、遠くからでも一見してそれと分かるものであった（枯死したので惜しまれながらも昭和48年に伐採された）。



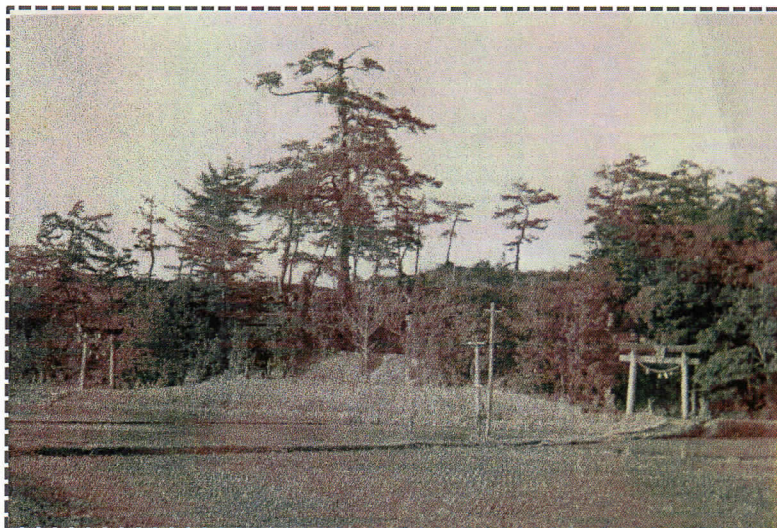
正面からみた本殿



神木跡を示す石碑と切り株（右手）



本殿の左にある境内社



中央に高くそびえるのがかつての「神木」

③ 宮山公園

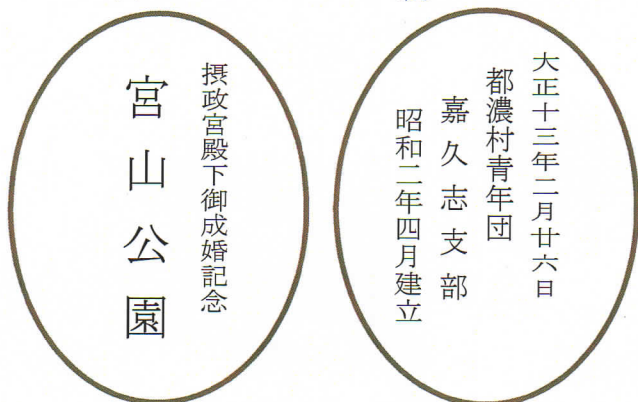
岩根神社の北側の丘陵地にある。かつては、桜の名所であった。近郷近在からのたくさんの花見客でにぎわい、遠足に来る小学校もあった。いつもは子ども達の遊び場であり、相撲場では子ども達の相撲大会も行われたりしていた。また、椎の実などを拾う光景もよく見られたものである。現在は記念樹などが植えられているが、管理等はなかなか難しいようである。



公園の西側奥部にある石碑
(左手前は記念樹の1つ)

表

裏



④ 中の島(宮の鼻)地蔵堂

六地蔵がまつられている。他所より持ち込んだものもある。中世の者が2体あると言われている。地蔵堂は2段になっていて、上段に地蔵さんが安置されている。下段は畳1畳くらいの広さがあり、旅人が横になって休んでいたこともあったといわれる。天保7年(1837)「萬書上帳」に記載がある。太平寺により法要がおこなわれていた。

‘中の島’と言われるように、以前は、周辺よりかなり高い島のようになっていた。新しくできた道路等の関係で今は少しだけ高くなっている。また、かつては海がもっと内部まで入っていたようである。

堂の右手には、一畑薬師の灯籠がある。

神社参道の両脇には、清水巖が刻んだと言われる狛犬(駒)があったといわれている。



岩根神社の参道入口にある中の島地蔵

⑤ 慰霊芳名碑

明治維新から大東亜戦争（太平洋戦争）終結までに亡くなった嘉久志出身の兵士の慰霊碑である。79名の名が刻まれている。若い兵隊さんが亡くなり、その両親が亡くなってしまえば誰も弔うものがいなくなるということから、神社を参拝する人たちが手を合わせしてくれることを願って、また、多くの犠牲があつて今があることを分かってほしいという願いのもと、嘉久志健老会が昭和53年3月に建立したものである。



⑥ 嘉恵碑

明治22年の建立である。『カエイヒ』とよんでいたが、南屋森脇家の銘名の文書によると、『カケイノヒ』と書かれている。

石見の地に薯作りを広めて飢饉から領民を救った井戸平左衛門に感謝をこめて建てられた碑である。芋代官碑は各所にあるが「嘉恵碑」となっているのは少ない。また、台座に「村中(むらじゅう)」と刻まれた碑はまれである。村民の感謝の気持ちがいかに強かったかがわかる。石碑も台座も風化等で傷みが激しく、早目の保存修復が待たれる。

<参考> 薩摩芋栽培の三大恩人

○井戸平左衛門（へいざえもん）

享保16年（1731）石見銀山の代官として60歳のときに赴任。享保の大飢饉（1732年）の時、旅の僧と出逢い、薩摩藩で持ち出し厳禁の琉球芋（以後薩摩芋という）を持ち帰らせ、領民に配って栽培を奨励した。多難を極めたが栽培できるようになった。

○青木秀清（しゅうせい）

渡津村長田の医師。享保18年（1733）ごろ長崎にて栽培法を研究した。「つる苗」での栽培法を広め、今日に至っている。渡津小学校の横に碑が立っている。

○石田初右衛門（はつえもん）

太田村（現松川町太田）の庄屋。薩摩芋の普及に努めた。特に、土塁をめぐらしたり、その上に竹垣を作ったりして猪や鹿の被害を防ぐ方法を考え広めた。



⑦ 嘉久志小学校

(1) 学校の創立

明治6年10月4日西楽庵(現西楽寺)に創立され、「嘉久志小学」といわれていた。学校長は医師の半井浩斎であった。学制がまだ定まっていなかったので、親等の強い要望によってできたのである。「四書五経」や「商売往来」を素読させたりしていたが、最も力を入れていたのは習字である。

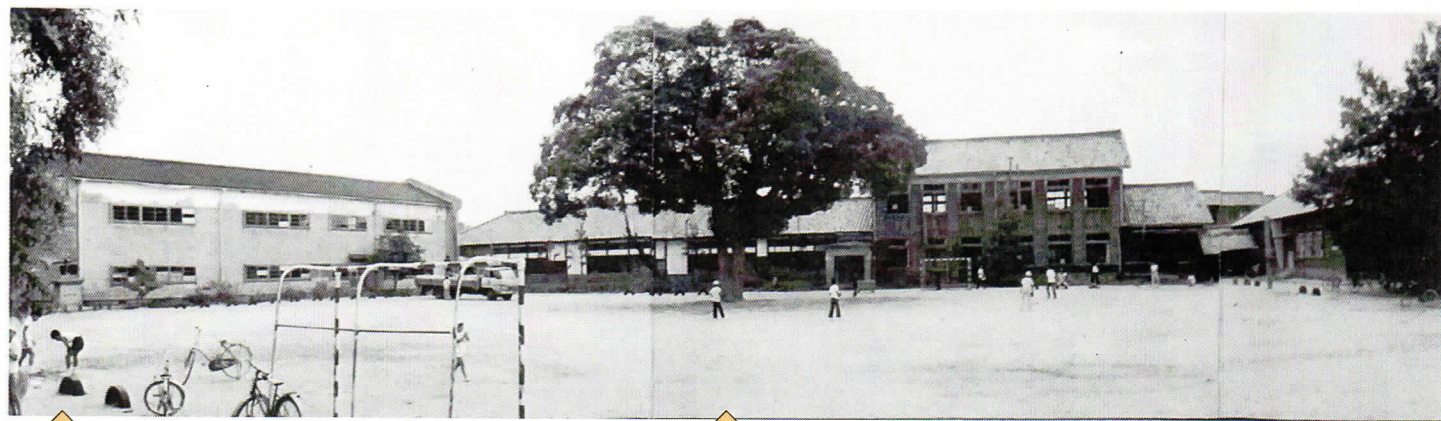
(2) 校名の移り変わり

明治11年5月ごろ	第24中学区第35番嘉久志小学
明治20年12月まで	第5番学区郷田小学校嘉久志分教場
明治21年1月	第9番学区嘉久志簡易小学校
明治25年4月	都濃村嘉久志尋常小学校
大正12年4月	都濃村尋常高等小学校
昭和7年4月	都濃村東尋常高等小学校
昭和15年4月	江津町嘉久志尋常高等小学校
昭和16年4月	江津町嘉久志国民学校
昭和22年4月	江津町立嘉久志小学校
昭和29年4月	江津市立嘉久志小学校
昭和46年4月	江津市立高角小学校



勤労青少年ホーム
入口にある標柱

かつて校門の様にな
っていたイルティッ
シュ号の機材の一部



↑
二宮金次郎像(校舎の角あたり)

↑
くすの木(楠)

解体直前の校舎(昭和48年8月)

くすの木(楠)

大正天皇が皇太子時代に山陰路巡幸(明治40年)の折、随行していた東郷元帥が校庭の端に植えたといわれる。その後、校庭が拡張されてこの楠は校庭中央辺りになり、関係者にとって大変思い出深いものである。現在は、コミュニティ交流センター裏(海側)に位置している。

なお、和木小学校にも同時期に植えられたようであるが、小学校解体時に伐採されて今はない。



上の写真とほぼ同
じ方向から写した
現在の楠

二宮金次郎像

嘉久志小学校にあった初代の像は銅製であったので、昭和17年ごろ戦争のため供出させられた。

戦後、田中治喜(松永屋)・森脇敏雄(浜佐屋)の兄弟が二代目を寄贈した。兄治喜(陶器販売業)が備前焼の金次郎像を、弟敏雄が2m余りの台座を寄贈したのである。設置場所は、現在のコミュニティ交流センター入口あたりであるが、昭和52年2月に高角小学校の校門付近に移設された。



現在 高角小学校にある像

校歌

「校歌の制定について」という綴り(作曲した田中賢二郎直筆のコピー)が小川義雄氏より提供された。それを基に紹介する。
制定の趣旨

嘉久志・和木両小学校の統合にあたって、両地区が仲良く協力し合って、お互いに郷土の発展に努力することが大切であると痛感していた当時の都濃村尋常小学校・福原作一校長の発案による。

校長は、ちょうど昭和天皇即位の御大典があることから、その記念に校歌を制定し、上の願いを実現しようと、また、児童の情操教育の一環として大いに活用しようと考えた。そして、江津に関係深い人に頼もうと次の人をお願いした。

作詞：波子出身の千代延尚壽(県立浜田中学教諭)

作曲：嘉久志出身の田中賢二郎(女子師範学校訓導)

制定より実施まで

△ 歌詞 七五調で歌いやすく、子ども達にあったものが送られてきた。

△ 作曲 曲の感じが浮かんできたので一気に作曲したとある。

恩師の先生にみてもらうほど‘大切な歌’と考えていたようである。

留意点・愛と平和のやさしい気持ちを表すこと。

- ・なるべく高音をさげよう。
- ・歌いやすく、しかも気品のあるものにしよう。
- ・合唱ができるよう和音(ハーモニー)をつける。

△ 福原校長ほか4名が浜田の女子師範付属小学校に出かけて来られたので、説明をしてから実地練習をした。

△ 昭和3年11月2日 運動会の時に6年生以上の子ども達に歌わせて地域の方々等に発表。大変好評であったようである。

昭和30年4月18日記載

以上、田中賢二郎が日記をもとにまとめたものである。



「校歌制定について」書かれた綴り



作曲者が手書きした校歌(コピー)

⑧ 嘉久志公民館

‘嘉久志小学校’ 思い出の「楠」の先端が見える

杉の子作業所の所にあった「嘉久志養蚕実行組合稚蚕共同飼育所」の二階の一室を借りて昭和 25 年 4 月に「江津町立嘉久志地区公民館」としてスタートした。

当時、一階は稚蚕飼育室である。二階の保育所がない時（夜間と日曜日）に公民館として利用できた。はじめは青年団、婦人会が盛んに活動していた。だんだんと各種の活動が活発になり、料理講習会、映画会、運動会（秋祭りの次の日に実施）、盆踊り大会、生活改善活動、宮山公園保存の活動など多岐にわたって行われてきた。町民挙げて各種の活動に参加していたといわれている。

そんな中、湯飲みや大火鉢などが寄贈され、本箱や謄写版印刷機など備品もだんだんそろってきた。

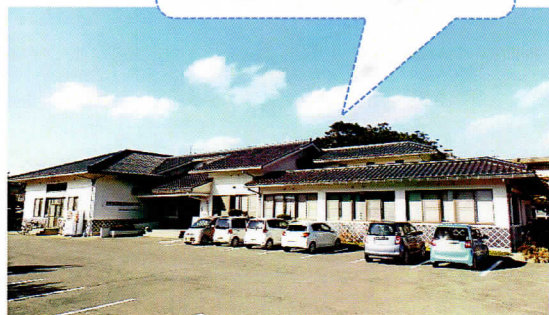
昭和 29 年に市制がしかれ「江津市立嘉久志公民館」として新たな出発をみた。このあたりから今現在の大きな事業が定着実施されてきた。昭和 40 年代には、桜開花時にぼんぼり飾りなどみんなで協力してやったことを懐かしがる人も多い。旧公民館は 25 年間使用された。

昭和 50 年に嘉久志保育所が浜の宮から宮山へ移転し、その跡地に公民館が移転し独立した形となった（右の写真）。その翌年、公民館拡張・整備の機運が高まり、市当局への陳情と募金活動が行われた。そして、講堂の増築がなされ、施設備品が整備された。

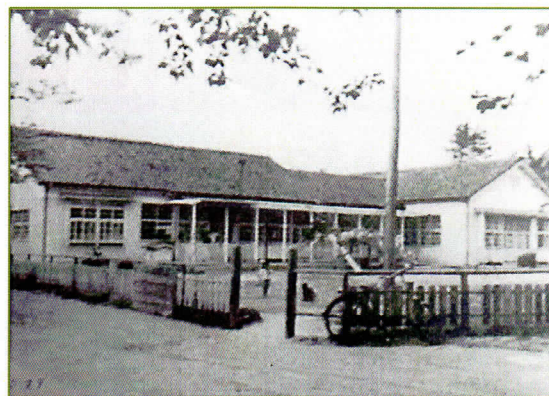
昭和 58 年新公民館建設運動が始まり、平成 2 年 4 月ついに新築開館した。床面積は 613 m²である。

そして、平成 26 年 4 月より「嘉久志地域コミュニティ交流センター」となり、地域の自主性や創意工夫を取り入れた‘まちづくり’の拠点として再スタートした。その中で、従来の公民館で行ってきた生涯学習として取り組んできたことを生かしてきている。

なお、嘉久志保育所は、稚蚕共同飼育所からスタートし、昭和 25 年から現在の浜の宮にあったが、昭和 50 年には宮山に新築移転した。そして、平成 21 年より‘めぐみ保育所’が新設されたのを機に閉園となった。



平成 2 年に完成した公民館
(今はコミュニティ交流センターに)



移転した保育所の後へ移った公民館
(浜の宮：今は相撲場がある広場)

⑨ イルティッシュ号 と 嘉久志

日露戦争の時に、イルティッシュ号の乗組員の救助（明治38年5月28日 日曜日）については、和木村民が尽力したことはよく知られている。

しかし、嘉久志の人たちも、関係方面への連絡や手配、各種の補助を積極的に行い乗組員たちを支えた。南屋森脇家の文書「日本海海戦露艦イルチッシュ号来降記」に詳しくある。

（記録人 森脇吉郎：都濃村助役）

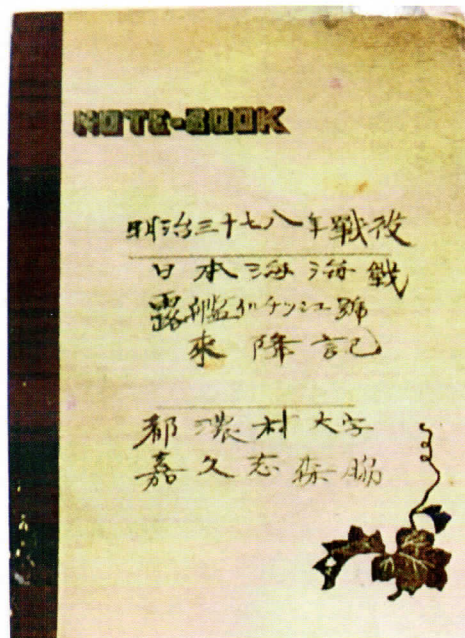
- 山林境界調査中、11時頃江川口沖を東進する巨大汽船を発見して、遠眼鏡を借りて観察し露国軍艦旗を認め、和木へ急行し再確認した。
- 嘉久志小学校の英語が話せる教師がロシア将校と話して上陸までの経緯等を知ることができた。
- 海戦で被弾し浸水が激しくて和木の浜に乗り上げようとしたが、大敷網の浮を敷設水雷と誤認して沖合で停船していたが、ついに沈没した。
- 救助後も県庁や郡役所、浜田連隊へ連絡が取れなかったうえに、村長が不在であったので、各種の対応については、助役の森脇吉郎が判断指示した。
- 負傷者は近くの和木小学校へ、下士官以下の兵士は嘉久志小学校へ収容した。将校については、郡会議員等をしていた広島屋森脇久五郎に相談の上、彼の自宅に収容してもらうことにした。
- 上陸兵は、将校22名、准士官6名、下士官33名、兵卒204名の合計265名である。

（和木の資料には、合計235名となっている。）

- 風聞により見物人が数万人も集まってきた。
- 翌5月29日、負傷兵は海路（漁船）にて、他は陸路で浜田連隊へ丁重に護送した。 等



長らく‘嘉久志小学校の校門’となっていたイルティッシュ号の機材



森脇吉郎が記録していたノート



森脇吉郎助役



ロシアの将校たちが写ったカラー写真

⑩ 森脇 忠 (画家)

明治 21 年 (1888) ~ 昭和 24 年 (1949) 61 歳で逝去。 広島屋森脇久五郎の二男として生まれる。 島根県第二中学 (現浜田高校) の時、杉浦非水先生に才能を認められ、画家を志す。 東京美術学校に入学し、黒田清輝らに師事する。 卒業後、第三高等学校 (後に京都大学に統合) で図画講師をする傍ら帝展などに入選を重ねる、当時の洋画壇で活躍した。

戦後は、浜田で制作に励んだ。 温厚で純真、潔癖で正直な人だったと伝えられている。

著書に「スケッチの描き方」(中沢弘光との共著)がある。 残っている作品は、

「舞妓」: 江津市文化財 (山崎病院所蔵)

「浅利海岸」: 浜田市文化財 (浜田高校所蔵)

他に、京都美術館に 7 点、家族の肖像画や絵葉書等が確認されている。



「舞妓」



御本尊を運んだ
入れ物 (木箱)

小川家所蔵

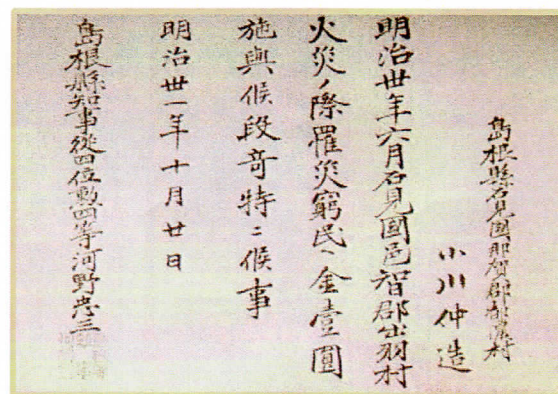
⑪ 妙好人 小川仲造

天保 13 (1842) 年、嘉久志の小川家の二男として生れる。 石見の妙好人の一人である。 大変な親孝行であった。 貧しい中にも商売の正しい在り方等を実践してお客の信頼を勝ち得てきた。 信仰に生き、熱心に布教活動にも取り組んだ。 石見に派遣された布教師と意気投合し、その協力のもと説教所であった西楽寺を一寺院へ発展させた。 また、麦が不作であった年などには年貢免除等を大地主にかけあったりして農民のためにも働いた。

仲造の妙好人たるゆえんは、念仏一途の生活の中で、社会のために寄金し、貧困者を救い、罹災者を助けようと努めたことにある。 それにより、県知事の表彰だけでも 14 回を超え、本願寺よりその徳行により院号をたまわっている。

仲造が亡くなった後も、その名を聞き、徳を偲んで各地より嘉久志の生家を訪ねる人がいるといわれる。

(⑳ 西楽寺参照)



県知事より贈られた表彰状

みょうこうにん
妙好人

一般に浄土真宗の信者で、特に熱心に信仰に生きた人をいいます。 全国には 45 名ほどいます。 石見では、仲造さんの他、江津・有福の善太郎さん、温泉津の浅原才市さんが知られています。

⑫ 石見の左甚五郎：清水 巖

あの有名な彫刻家・左甚五郎の名を冠して称えられた『清水 巖』は、根付彫刻家である。この「巖」は、初代巖(号富春)・二代おさい(号文章、尾の江)・三代鹿造(号巖水)の親子3代の総称である。巖の作品は、「石見根付」といわれ、写実的で細密なことから特に海外で高く評価されている。(外国人による石見根付の研究物が数多く出されている。市内にも原書が何冊もある。)

初代：^{とみはる}清水富春 享保18年(1733)出雲玉造に生まれる。

仏門に入るが生来彫刻を好み、江戸で業を修めた。帰郷後、石見各地を転移し、宝暦年間に嘉久志の「清源庵」に居を構えた。嘉久志の女性と結婚し長女おさい(文章)が生まれた。いろいろな材に動植物の写実的作品を多く彫った。また、俳句等も嗜み、優れた句がある。文化7年(1810)没。享年78歳。墓は、はじめ西の谷にあったが、今は、寺側の墓所に移されて新しくなっている。

弟子の中には、「長浜人形」の礎を築いた者もいる。

二代：^{ぶんしょう}小川文章 明和元年(1764)初代富春の長女。小川家の二男に嫁し、分家して恵島屋に。父に劣らぬ根付彫刻の数々を残している。ほとんどが海外に流出し、初代同様国内より海外において高く評価されている。俳句や書にも優れた作品がある。天保9年(1838)没。享年75歳。

三代：^{がんすい}小川巖水 文化6年(1809)二代文章の子。江戸の彫刻家と技を競い、相手を負かしたために刺殺されそうになって早馬で大阪に逃れた話はよく知られている。初代、二代に劣らず、特に鼠の根付に優れたものがある。蛭子南のアパート駐車場の一角に庵所(⑫-2)があって、巖水自らが植えたサルスベリの木があった。その枝も根付彫刻の材の1つとした。

根付の例



ねつけ
根付

着物を着る男子が、煙草入れ・巾着・印籠などを帯にはさんで腰に下げる時、落ちないようにそのひもの端につけた物。角やサンゴなどの材が使われている。形は小さいが、動植物などを精巧に彫刻したものが多い。「帯ばさみ」ともいわれた。



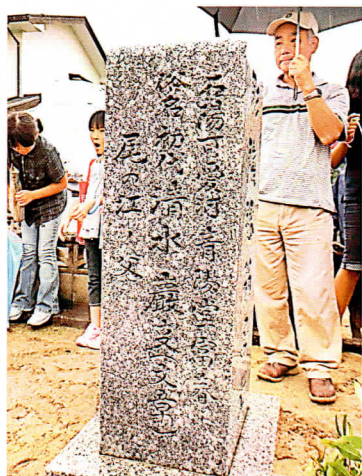
わけだに
分田谷にあった「清源庵」
せいげんあん
跡を示す標柱 ←



↑ 清源庵のあった所



初代巖の墓標



⑬ 江津中央公園

旧原田の田畑を造成して野球場、体育館、プール等を備えた運動公園が造られた。市民体育館前の定礎は、昭和56年となっている。

昭和57年の「くにびき国体」では、‘水球’の大会に当時の皇太子殿下ご夫妻（今上天皇ご夫妻）をお迎えした。また、秋季大会には、高松宮殿下ご夫妻がお越しになり‘軟式野球’大会をご覧になった。

各施設の概要は、以下の通りである。

- 市民体育館 1階：46m×32m（1472㎡）
2階：客席800席＋収容330席
バレー、バスケット、ハンドボール、テニス、バドミントン等のコート
- 市民球場 両翼91m、中堅120m 照明施設4基
- 市民プール 50m公認プール（水球時は水深1.9mに） 徒渉プール付き
- 市民庭球場 コート8面 照明灯10基
- 第2体育館 30m×24m（720㎡） バレー、バドミントン、卓球などに利用
- 多目的広場 第4種公認陸上競技場 400mトラック6コース 直線100m6コース
サッカーやゲートボール、運動会等にも利用されている。



⑭ 新谷・護王神社

祭神、由緒ともに不明である。

社殿は、昭和56年10月に新谷地区の集会所が新築された時、それに隣接して設けられた。

祭りは、春は3月の第3日曜日に、秋は11月の第3日曜日に住民総出で執り行われている。



⑮ 原田溝跡・堰跡（久保川）

旧原田は、中央公園を造成する前までは、田んぼが広がっていた所である。水は、遠く1kmほど先の久保川地区から引かれていた。その水路は‘原田溝’と呼ばれ、現在も水源の堰（通称いで）やコンクリートの水路跡（幅約50cm×深さ約40cm）が残っている。

原田溝は、上と下の2本があった。水路は土の溝であった。（上の溝は昭和30年代前半にコンクリート製になった）。久保川入口恵木川と交差する所は谷が奥深く、遠回りしていたためV字状の水路（サイフォン）を造り、その距離を大幅に短縮させた。谷の両側には現在も溜桝や直径約40cmの管が残っている。米作りの元となる水の確保に大変な努力をしてきたことがわかる。



今も流れている「溝」



通称‘いで’の跡

⑯ 久保川のクロガネモチ

クロガネモチは星高山（高角山）山麓では比較的多く見られる。この木はもともと暖地性の樹種である。この近辺では見られない巨木としての価値が大である。樹齢300年以上と推定されている。昭和56年には江津市天然記念物に指定された。昭和57年発行の江津市誌には、かつて松江城山にあった県指定の天然記念物クロガネモチが倒れたので、この3本が最東端でかつ最大であると記されている。

仁井屋（佐々木家）

雄木 周囲4.0m 樹高8m

雌木 周囲3.8m 樹高10m

段原（城山家）

雄木 周囲4.5m 樹高10m



⑪ たたら製鉄と鉄滓

島の星山(星高山)の麓から久保川、嘉久志にかけての山には真砂鉄や赤目砂鉄を多く含んだ地層が多くみられ、江戸時代から明治末期まで「鉄穴流し」や「炉吹き」が盛んに行われていた。

炉吹きは真砂鉄を溶かして鋳(和鋼)を作る‘鋳押し’と赤目砂鉄から銑鉄を作る‘銑押し’の2通りがあった。それぞれ木炭を3, 4 昼夜燃やし続け、溶銑炉の温度は1400℃にも達していたという。鉄滓(通称とくそ)は鋳や銑鉄をとった残りかすで、砂鉄の中の砂や粘土などが溶けた物であり、炉があった場所を知る貴重な手がかりとなる。コミュニティ交流センター入口に説明板ととくそが置いてある。このとくそは久保川炉の跡地の物とあるが、その場所をはっきりしない。

山砂鉄(真砂鉄)は、新川支流の一の谷川から土床にかけてよく採れたと聞いている。かつては土床の竹岡屋敷地に山のように積み上げられていたが、今ではその残骸が見られる程度である。久保川の城山ユウコウ田道路脇の斜面にもとくそが見出される。

森脇家文書(明治8年)の産物表には、嘉久志村小鉄540駄、久保川村小鉄500駄とほぼ同量の記述がある。これらの鉄は、土床坂を通して出荷されたのではないかと推測される。

真砂(まさ) 鉄穴(かんな)
鋳(けら) 銑(ずく)
銑鉄(せんてつ) : 鉄鋳を溶かして
つくった不純な鉄



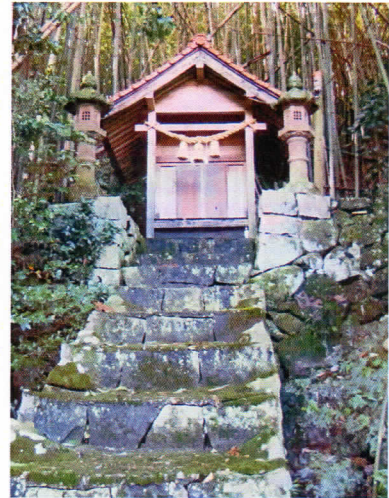
センター入口にある‘とくそ’

⑫ 久保川・大歳神社、大元神社

大歳神社の祭神は、宇賀御魂命(うがのみたまのみ)である。旧久保川村の氏神である。社殿は、棟札から万治4(1661)年の建立とみられる。久保川村は、明治8年に嘉久志村と合併して、嘉久志村大字久保川となった。番地は、嘉久志がイ番地、久保川がロ番地として今も使われている。

大元神社は、安政6(1859)年に上久保川(屋号)に祀られていた社を合祀したと言われている。

両神社の例祭は、毎年11月の第3日曜日に行なわれている。当日は、朝から地元の人が3つの注連縄(鳥居、大歳さん、大元さん)と「33尋の縄」(神域をしめし、7本、5本、3本のさがりをつけたもの)を作って神事の準備をし、夕方5時より宮司を迎えて祭りを執り行っている。



大歳神社



ひろ
「33尋の縄」が張られた大元神社

⑱ 土床坂

石見焼の原料となる良い粘土層があることからこの名が付いたようである。写真は現在の土床坂の一部で、当時の舗装道路である。この石畳は、浜田街道として天保年間(1830~43年)江戸後半の大変な時代に造られた。道幅は約1間(1.8m)程で、急こう配である。全長は245m位、本町部分は160m位、嘉久志部分は85m位である。残念ながら嘉久志部分は表面に出ていない。本町部分も60m位しか見ることができない。昭和20年代、乳母車でこの坂を散歩したと聞いている。今のような凸凹石畳ではなかったと思われる。



下から見た雨後の‘石畳’

領界標柱

嘉久志の人にはよく知られた標柱である。天領郷田村と浜田藩の嘉久志村との境界を示していた。浜田街道の土床坂を登りきった所に立っている。この辺りは、天領と浜田藩領の引継地であったため、しばしばトラブルが起きていた。標柱など特に道路に近い物は、その時々々の情勢によって移されることがしばしばあった。また、長州戦争後の慶応4年(1868)にこの標柱は撤去を命ぜられ、岩根神社の一隅に置かれていたこともあった。道路拡張等でその位置は若干ずれていると思われる。



村界標柱

現在地は嘉久志側である。ここに江田村を表示したとすれば、ここは天領であったことになる。土床坂から考えて、嘉久志と郷田の境界は、現在の島の星(星高山)につながる道路ではないのではなかろうか。‘江田村’と‘郷田村’については、「江津市の歴史」(山本熊太郎著)に次ぎの様に記されている。

『どうもいつとはなしに江津を江田村というに至り、明治12年戸長役場から独立役場となったとき郷田村になり明治22年、町村制実施とともに江津村、大正3年に江津町となった。村名の変化は要するに郷が江となり、田が津となって、この地本来の機能を表すようになった。』



経回国成就塚

元文5年(1740)郷田村の室屋初代当主横田金兵衛が法華経を写経し、全国66か国にある霊場に奉納するという目標を達成した記念の塚である。右側面に「元五申」とあり元文5年庚申の年に成就(達成)したことが分かる。左には「(日本)行(脚)」「(横田金)兵衛」とある。<「石見潟27号」参照> 金兵衛は、沖田屋5代横田彦左衛門美教の末子で分家した。



奉納
経回国成就塚
天下泰平
国土安全

⑳ 根木・荒神社

祭神は、猿田彦命であり、防火、疾病除けの神様として信仰されている。沖を通る船を止めるほどの勢いがあったといわれ、祠は日本海の方をさけて南方に向けられている。

明治 42 年に岩根神社に一旦移されたが、大正 7 年頃に再び根木地区にもどされた。昭和 59 年には新たに祠が建てられ、厳粛に遷宮祭がおこなわれた。

根木地区にはかつて瓦屋や丸物屋の工場が多くあり、原料の粘土の採掘が各所で行われていたため、現在地に至るまでに 2 回移転している。

荒神祭は、毎年 1 月 15 日に近い日曜日に行われ、輪番で当家が世話をしている。



西側から見た荒神社の社

㉑ 根木・御大師堂

文政 7 年(1824)網屋市右衛門が建立した。中央に地藏菩薩像(高さ 120cm)、延命地藏(網屋)を安置し、地藏 14 体、弘法大師 7 体が祀られている。現在は、「御大師堂」の札がかかっているが、元は地藏堂であったと思われる。

中には、石見の左甚五郎といわれた初代清水巖(⑫参照)が刻んだ小中屋の地藏がある。安永年間(1772～)中ごろ澤津氏が西国 88 か所巡りをしたおりの 19 番、72 番太子堂の像もある。これに加え、平成 22 年に 2 体が加わった。それは、近所で大貫屋が祀っていたが絶えたので今田屋と表野屋が引継いだものである。1 体は蓮華座の上に地藏菩薩像、もう一体は明治 30 年代に今田屋の主が眼病を患い一畑薬師へお参りし、平癒した報恩のための薬師如来像である。

お堂は、昭和 60 年 6 月に再建された。祭りは、4 月 20 日頃である。

(石見瀧 19 号参考)



きれいにされている内部

②② 蛭子南・恵比須神社

通称「えびすさん、えべっさん」といわれる。祭神は‘事代主(ことしろぬし)命’で、大国主命〔大黒さん〕が父神である。

この恵比須(蛭子)さんが、いつごろこの地に鎮座されたか記録等がないのではっきりしない。この蛭子地区の地名は、この「えびすさん」に関わりがあると思われるが、これも詳らかでない。

祭りは、毎年1月20日に近い土曜日に「えびす講」の人たちでおこなわれている。この講もいつごろから始まったかはっきりしない。大正11年2月に奉納された大幟がある。

「えびすさん」には、「街えびす」と「浜えびす」があった。

< ②⑤ 浜蛭子社 参照 >



9号線沿い(山側・南)に鎮座(平成27年に囲いがされた)

②③ 星島跡

「星島」は大きく3つの島からなっていた。たびたび郷田村と村境のことで争いがあったらしい。江戸時代にその争いを解決して、2島(東の男島、西の女島)が嘉久志村のものとなった。

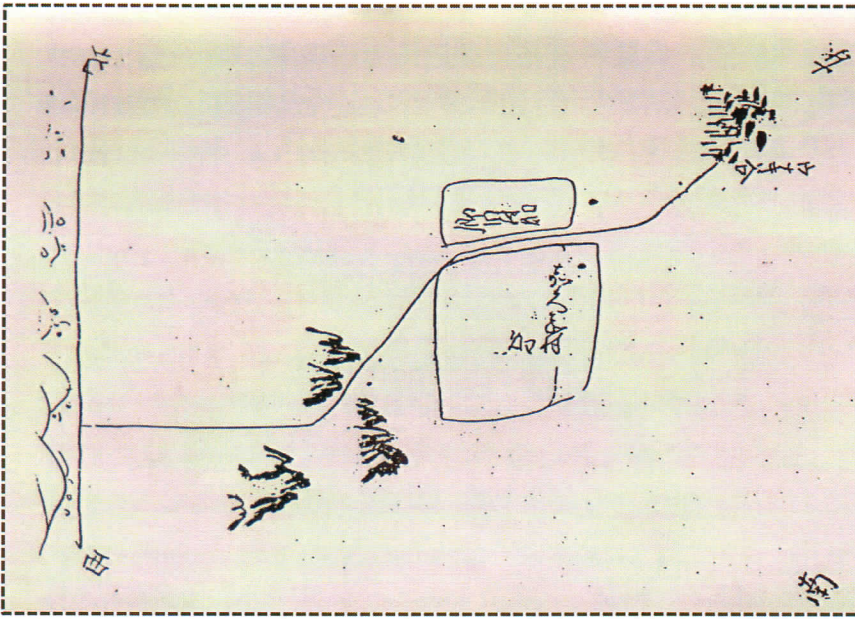
女島は、江戸時代にお台場の石垣に利用されたようである。

埋め立てが進み、現在は女島の一部だけを見ることができる。

< ②④ お台場跡 参照 >



「女島」の一部



寛政九年(1797)頃の絵図(南屋古文書より)

②4 お台場跡

江戸時代に外国から日本を護るために造った土塁(石垣)。

嘉永6年(1853)アメリカのペリーが軍艦4隻で来航してきた。そこで、幕府は各藩に海岸の守りを命じた。浜田藩は、嘉久志の浜に高さ3m、上底9m、下底12m弱の台形型の土塁(石垣)を築いた。これには、嘉久志村の石工万兵衛が中心となり、安政元年(1854)に完成させたとある(「澤津家文書」)。藩はそこに大砲を載せて備えようとしたが、財政上の都合で設置できなかった。

明治7年発行のイギリスの世界地図に‘嘉久志’の地名が載っているのもお台場があったからと思われる。

大正14年(1925)頃までは、お台場の石垣は残っていて、子ども達は行ってはいけないところと言われていた。藩の立入禁止令がこんな形で残っていたのかもしれない。

(おおよその場所は地図にポイント②4でしめす)

②5 浜蛭子社

鎮座地は、嘉久志海岸であった。時期は不明であるが、大浜屋が建立したと言われる。

例祭は、旧10月20日であった。

岩根神社記念誌に『明治4年 字大浜 浦蛭子社』とある。これが浜蛭子社と思われる。また、柏屋文書には『大正5年 蛭子祭 浜ニテ舞ヲマイタリ』とある。大浜屋が主導し、網元たちで祭を行っていたと考えられる。昭和4年から柏屋が中心になり祭典を行っていた。また、『昭和12、13年舞代支払』とある。この時期、盛大に行われていたようで、神輿もでたと聞いている。

昭和43年まで続いていたが、44年に御神体が盗難に遭い、祭りは中止となっていた。

60年代初めに祭りをして神社を焼納し、今はみられない。

(おおよその場所は地図にポイント②5でしめす)

田尻川



かつては田尻川に沿って桜並木があった



公民館出口の白線の下あたりを流れる田尻川

新川



中流 (地場産センター下)

②⑥ 田尻川と新川

島の星 (高角山) から久保川を経た川の流れは、田尻川と新川の2本があったようである。

田尻川の起点は、はっきりしない。かつて岩根神社の前には田んぼが一面に広がっていて、東西両側に溝を大きくしたような水路があった。下流の蛭子北には堤防の跡が残っている。大雨の時には、堤防が決壊することもあったようである。また、古老からは、70年ほど前までは宮の鼻(岩根神社参道入口)近くでしじみ貝を採った等の話も聞く。

今は旧嘉久志小学校 (現コミセン) 辺りから国道9号までは蓋がされた排水溝となっている。かつて昭和天皇御大典記念として青年団等が桜の苗木を植えてから、一時は宮山公園と共に桜の名所として大勢の花見客で賑わったことだった。

新川は、享保年間 (280年ほど前) に人口の水路で砂鉄採取後の泥土を海岸まで導入し、黒松を植えて防風林とし耕地を造成した。田尻川の流れを分水して新川を新設、浜田往来建設に着手したとある。享保以来、浜は600mほど沖に伸び、川の長さは安政3年(1856)より250m位長くなったとある。どの辺りまで工事がなされたのか不明であるが、現在より短かったのは確かである。

②⑦ 西楽寺 (仲造さん、菊藤大超頌徳碑)

西楽寺年譜によるとこのようなことが記されている。
◇明和年間(1764~1772)に久利村(大田市)の光善寺を現在地に移して西楽庵(説教所)とした。

◇当時、嘉久志にはこの庵寺のみであった。石見地方を布教して回っていた福知山の住職菊藤大超と嘉久志村の小川仲造(のちに妙好人と呼ばれる)が、本山に熱心に願い出て、この庵寺を寺として認めてもらった。

◇御本尊の「因幡の御影」は大超住職と仲造が広島駅から2日かけて背負って帰ってきた。仲造が運搬に使った木箱は、今も小川家に保管されている。

平成16年に本堂が修復された。それまでは、大正元年に谷村(桜江町谷住郷谷)の西圓寺が廃寺となったとき堂舎を譲り受けて移築したものであるが、その陰には住民の力強い支援があったことを記しておく。

< ①① 妙好人 小川仲造 参照 >



新築当時の本堂



仲造さん達が建てた菊藤大超師の頌徳碑

嘉久志の町紹介

○地 勢

面積 4.98 km²

東西 最大 約 2.3 km

最少 約 1.3 km

南北 最大 約 3.0 km

○世帯数・人口（平成 28 年 1 月末現在）

1,433 世帯

3,063 人 （男：1,446 人 女：1,617 人）

参考資料

嘉久志南屋古文書 多数

嘉久志南屋保管の写真、絵図等

日本海海戦露艦イルチツシュ号来降記

岩根神社三百五十年記念誌

西楽寺本堂修復記念誌

江津市誌

江津人物伝

石見瀉（18号、19号、27号）

高角小学校三十周年記念誌

江津市の歴史（山本熊太郎著）

嘉久志公民館創立五十周年記念誌

昭和三年制定校歌「校歌制定について」

館報かくし第 11 号

江津中央公園施設案内

参加メンバー

郷土学習会

顧問

森 脇 傳・森 脇 洋 二・林 忠

部長

田 中 睦 次

会長

城 山 一 則

副会長

金 田 健 男・田 中 国 男

編集委員

小 川 泰 道・小 川 義 雄・神 山 哲 夫

片 岡 尊 宏・森 山 悦 子

ほか会員

16名